世界名作劇場

小公女セーラ（プリンセス）

『雪の日の追放』

第 42 話

提供　ハウス食品工業

制作　日本アニメーション
　　　フジテレビ

脚本

中西隆三

鎌田秀美

登場キャラクター（第42話「雪の日の追放」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
アーメンガード
ロッティ
ラビニア
ジェシー
ガートルード

モーリー

ジェームス

ジム

ガラス直しの少年

メアリ

マギー

泥さらいの少年

ゴミ集めの少年

新聞売りの少年

靴磨きの少年

エミリー（人形）

シーザー（猫）

1

モンタージュ（第41話より・夜）

馬小屋の中で提灯を手に見廻すロッティ。

×　×　×

明り窓からヌッと三つのお化けカボチャ。

×　×　×

仰天して悲鳴で逃げるロッティ――

×　×　×

明り窓でフフと顔を見合せるラビニア達

×　×　×

床で燃え出すワラ――

×　×　×

駆けつけるセーラとベッキー――

×　×　×

火中にエミリーと写真額を拾うセーラ。

×　　×　　×

燃える馬小屋を茫然と見て立尽すセーラ。

2　ミンチン女学院・全景（朝）

——霧が流れている。

3　同・馬小屋の全景

焼け落ちた屋根。半焼の明り窓に微かに白煙がくすぶり、隣接する学院のレンガ外壁に炎の痕が黒くすすけている。

ミンチンの鋭い声がかぶる——

ミンチンの声「お黙り、セーラ！」

4

同・院長室

激怒したミンチンの前にセーラ。脇にオロオロするアメリア。

ミンチン「この学院に火をつけようだなんて、お前と云う子は、なんて怖しい事を……さ、正直に白状するんです！」

セーラ「ち、違うんです、院長先生……私が駆けつけた時は、馬小屋は一面火の海で、なぜ火事になったのか、私にも……」

ミンチン「まだそんな云い訳を……お前は、屋根裏からあそこへ移された腹いせに、火をつけたに決っています！」

セーラ「そ、そんな！」

アメリア「お姉様……まだセーラさんがやったと決った訳では……」

ミンチン「いいえ、この子です……この子は前々から私を憎んでいました。他に犯人がいる筈はないんです！」

セーラ、抗議の眼で見返す——

ミンチン「な、なんです、その眼は……」
セーラ、凝然と見る――
ミンチン「こ、この傲慢な、嘘つき娘が……」
カッとして右手を振り上げる――

5 同・廊 下

「ピシャッ！」と音がし、アメリアの声が追う。
アメリアの声「お姉様……！」

× × ×

集って聞耳を立てていたラビニア、ジェシー、ガートルードと――ロッティ、アーメンガード以下の女生徒たち。
ジェシー「（囁く）院長先生に叩かれてるわ」
ラビニア「フン……当然よ」

ガートルード「でも、なんだか可哀想みたい」
泣顔でアーメンガードと顔を見合せるロッティ――

6 同・院長室

頬を押えてうつむくセーラの前に、威丈高のミンチン。
脇に心配顔のアメリア。
ミンチン「フン……一体お前は、これまで誰のお蔭で生てて来られたと思ってるんです……お前をこの家においてやった、私の親切のお蔭なんですよ！」
セーラ、静かに蒼ざめた顔をあげる。
セーラ「先生は……私に、親切だった事はありませんでした……」
ミンチン「な、なんですって？」
セーラ「それに……ここが、私にとって、うちだった事もありませんん……」

ミンチン「で、で、出てお行き！……お前のような恩知らずは、顔も見たくない！　勝手にどこかで野垂れ死するといいんだ、さ、とっとと出てお行き！」

アメリア「お、お姉様……！」

セーラ「判りました……院長先生が、そうお望みでしたら……その通りに致します……ごきげんよう、院長先生……アメリア先生」

セーラ、一礼してドアへ——

アメリア「セ、セーラさん！」

ミンチン「アメリア！」

7

同・廊下

ぱっと散るラビニア、ジェシー、ガートルード以下の女生徒たち——

院長室のドアが開き、出て来るセーラ。

アーメンガードとロッティが駆け寄る。

ロッティ「セーラ・ママ！」

アーメンガード「セーラ……！」

セーラ「ロッティ！……アーメンガード！」

アーメンガード「ね、セーラ……あなた、この学校を出て行ったりしないでしょ。嘘よね」

ロッティ「（泣顔）セーラ・ママ！　嘘だって云ってよォ！」

セーラ、吐息して淋しく首を振る。

セーラ「嘘ではないのよ、ロッティ、アーメンガード……私は、もうあなたたちと一緒にはいられなくなったのよ」

ロッティ「イヤだ、イヤだ！……セーラ・ママがいなくなっちゃイヤだァ！（泣く）」

セーラ「許して、ロッティ……またいつか、きっと逢えると思うわ……アーメンガードも元気でね」

アーメンガード「セーラ……」
セーラ、地下の階段の方へ――
その行手に立っていたラビニア、ジェシー、ガートルードが、冷笑して道をあける。
ラビニア「またいつか、逢えるかもね、セーラ」
セーラ「（みつめて）ありがと、ラビニア」
セーラ、地下の階段口へ消える。
ロッティ「い、行かないで、セーラ・ママ！」
アーメンガード「セーラ……！」

8 同・地下の作業場

入って来るセーラ、石炭置場の上に置いてあったエミリーと父母の写真額をそっと取り上げる――
その時、石炭バケツを手に、飛び込んで来るベッキー

ベッキー「お嬢様……！」

——

途端に、石炭バケツが手を離れ、ザッとバケツごと石炭が床にぶちまかれる——

ベッキー「お、お話は聞きましたです……お嬢様が火を出した訳でもないのに、追い出されるなんて……あ、あんまりです（泣く）」

セーラ「ベッキー……仕方がないのよ……私も、いつかはこうなるような気がしていたの……」

ベッキー「そ、そんな……」

セーラ「心配しないで、ベッキー……私、きっと、強く生きて行くつもりよ……」

ベッキーの眼に涙が光る——

ベッキー「お嬢様……」

そこへモリーとジェームスが入って来る。

モリー「おや、お前さん、まだこんな所にいたのかい」
ジェームス「さあさあ、眼ざわりだから、とっとと出て行きな」
セーラ「お世話になりました、モリーさんにジェームスさん……じゃ、ベッキー……」
ベッキー「お嬢様……（追う）」

セーラ、別れの会釈をすると戸口へ——

9

同・使用人階段の下

セーラ、出て来る—— 続いて追って来るベッキー。

ベッキー「お嬢様……（涙声）」
セーラ「泣かないで、ベッキー……生きていれば、きっとまた逢えるわ……元気でね」

セーラ、使用人階段を上へ——

ベッキー「お嬢様……（追う）」

10

同・表

階段を上って来るセーラと、ベッキー。
玄関で眠っていたシーザーが、眼をさましてひと鳴き
するると、セーラに近づいて来る――

セーラ「シーザー……！」
シーザー、セーラの足許にまとわりついて鳴く――
セーラ、抱き上げる。

セーラ「さようなら、シーザー」
鳴くシーザー――

セーラ「ベッキー、お願いね」
セーラ、シーザーをベッキーに預けると、通りへ歩き
出す――

ベッキー「お嬢様……！」

11

同・二階の出窓

鈴なりになって見送っているロッティ、アーメンガード以下の女生徒たち――

ロッティ「セ、セーラ・ママ……（泣く）」

アーメンガード「セーラ……（泣顔）」

×　　×　　×

――遠去って行くセーラの後姿。

12

同・院長室

焦々と歩き廻っているミンチンに、アメリアが怖る怖る機嫌をとる――

アメリア「あのォ、お姉様……ほんとに、よろしいんでしょうか、あんな事をなさってしまって……」

ミンチン「な、なんの事です」

アメリア「勿論、セーラさんの事ですわ……この学院を追い出した事が、もし市長夫人のお耳にでも入ったら、それこそ一大事……」

ミンチン、ドキリとなり、慌てて軌道修正する――

ミンチン「ア、アメリア……」

アメリア「は?」

ミンチン「私が、本気であのセーラを追い出したとでも思ってるんですか」

アメリア「えッ……」

ミンチン「みせしめに決ってるじゃありませんか。さ、まだ遠くへは行かない筈です。行って、連れ戻して来るんです!」

アメリア「は、はい、お姉様!」

アメリア、慌てて飛び出す――

13

街の通り

探しながら呼ぶアメリア――

アメリア「セーラさん……セーラさん……！」

だが、既にセーラの姿はない――

14

コベントガーデン近くの馬の水呑場

辻音楽師の老人が、オルゴールを鳴らしている――

エミリーと写真額を抱いて、あてもなく来るセーラ、

立停り、はっと辺りに気がつく――

セーラのM「ここは……コベントガーデン市場だわ……」

一方に、買出しの野菜篭を抱えた人々が行き交うのが

見える。

セーラのM「もう、野菜の買い出しに来る必要もなくなったのに…

…あてもなく、ここへ来てしまったのだわ……」

――悲しくオルゴールをかなでる辻音楽師の老人。

セーラのM「そうだわ……もう、ピーターとも逢えなくなるのだわ……さようなら、ピーター……」

セーラ、そっと一方へ歩き出す――

――オルゴールを鳴し続ける辻音楽師の老人。

15

同・近くの路地

トボトボと来るセーラ――

突然、背後から声が呼びかける――

声「お嬢さんじゃありませんか！」

はっと振返るセーラ――

一方に、例の煙突掃除の少年と一緒に立っているピーターの姿――

セーラ「ピーター……！」

ピーター、急いでセーラに駆け寄って来る——続く煙突掃除の少年。

ピーター「一体どうしたんです。お人形なんか抱えて……買い出しじゃなかったんですか」

セーラ「ピーター……」

セーラの眼に、こらえていた涙が一気に溢れ出て来る

——

セーラ「私……私……とうとう、あの学院には、いられなくなってしまったのよ……」

ピーター「な、なんですって？」

セーラ、涙の顔でうつむく——

ピーター、煙突掃除の少年と顔を見合せたが、続ける

——

ピーター「と、とにかく、ここじゃなんです……あそこで訳を聞か

せて下さい」

16 小公園の中

小公園の中パッと鳩が舞い上る。

× × ×

ベンチに坐ったセーラの前に、腕を組んだピーターと煙突掃除の少年――

ピーター「畜生……そうだったんですか……」

ピーター、口惜しそうに吐き出す。

ピーター「お嬢さんを火つけの犯人に仕立てて追い出すなんて、なんてひどい連中なんだ」

煙突掃除の少年、急いで頷く。

ピーター「判りましたよ、お嬢さん……なあに、ご心配には及びません……このオレがついてますからね」

セーラ「ピーター……」

ピーター「(少年に)おい、ひとっ走り、みんなを集めといてくれ」

少　年「よしきた……(ぱっと駆け去る)」

ピーター「さ、お嬢さん、案内しますよ」

――セーラ、茫然と立上る。

(中　C　M)

17

裏町の通り

ピーターに案内されて来るセーラ――

×　　　×　　　×

よどんだ運河の入江で、ピーターと同年位の少年が、腰まで水につかりながら、フルイで川底をさらっている。

ふと顔をあげ、ピーターに声をかける。

少　年「やあ、ピーター……今日は市場はおしまいかい？」

ピーターも、足をとめ、答える――

ピーター「ああ、急な用事が出来てね……どうだい、商売の方は？」

少　年「駄目駄目……骨の芯まで冷え込むばっかりで、ロクな得物はありゃしないさ」

ピーター「そうか……まあ、頑張れよ」

少　年「はっはっは、お互いにな」

少年、またフルイで川底をさらい始める。
怪訝に少年を見て聞くセーラ
セーラ「こんな運河に、お魚でもいるの？」
ピーター「魚ですって？」
ピーター、笑い出す——
ピーター「いやあ、あいつは魚をとってるんじゃありませんよ……泥ひばりって奴です」
セーラ「泥ひばり……？」
ピーター「つまり、ああやって川の中へ入って、泥さらいをして、なにか金めのものを見つける商売ですよ」
セーラ「金めなものって……？」
ピーター「ま、舟から荷揚げする時に、川の中へこぼした石炭クズとか……誰かが捨てた鉄や銅のクズとか……うまく行きゃ、コインなんかも拾える事があるんです」
セーラ「まあ……」

ピーター「でも、冬は、つらい仕事ですよ……さ、行きましょう」
茫然と少年を見て続くセーラ――

18 裏町の四ツ辻

ピーターとセーラが来る――
一方から、ゴミや石炭ガラを積んだ荷車を曳いて来る
少年――

少　年「やあ、ピーター……」
ピーター「やあ、商売替えしたのかい」
少　年「ああ、こっちの方が、ちっとばかりみいりがいいからな」
ピーター「頑張れよ」
少　年「ああ、お前もな」
少年、重そうな荷車を曳いて去って行く。
ピーター、見送ってセーラに説明する。

19

ピーターの家の表

ピーター「ああやって、ゴミや石炭ガラを集めて、ゴミ集めの親方の所へ運ぶと、親方からいくらかお金が貰えるんですよ」
セーラ「まあ……ゴミや石炭ガラがお金になるの？」
ピーター「野菜クズは豚やニワトリの餌に出せるし、荒い石炭ガラは煉瓦工場へ材料に、細かい灰は肥料に売れるんです……ゴミだろうがなんだろうが、ここじゃお金にならないものなんて、ありませんよ」
セーラ「驚いたわ……私、今までに知らなかった事よ」
ピーター「まだまだ、お嬢さんの知らない世界は、沢山ありますよ……でも、みんな、ああやって一生懸命働きながら、生きているんです」
セーラ「そうなのね、ピーター……」
凝然と見送るセーラ――

ピーターがセーラを案内して来る。

ピーター「お嬢さん、ここがオレの家です」

セーラ「えっ……」

セーラ、驚いてみる。

そこは、並んだ馬車房の外れの一角で、改造したらしい表扉の一部にくぐり戸がつけられている。

ピーター「へへ、もとは馬小屋だったけど、借して貰って、住めるように直したんですよ」

セーラ「まあ……」

ピーター「ま、馬小屋に住んでるのは、お嬢さんだけじゃないって訳ですよ（笑う）」

セーラ「まあ、ピーターったら……（笑う）」

ピーター「あ、ちょっと待ってて下さいね。父さんや母さんが、腰を抜かさないように、お嬢さんをお連れした事を話して来ますからね」

セーラ「え、ええ……」

ピーター、表扉のくぐり戸を入って行く。

セーラ、ほっと息をつく――

その時、（ヒヒーン！）といななき。

はっと見ると、隣りの馬車房の表扉から馬がのぞいて

嘀いているのが見える。

その傍で、世話をしている小さな男の子の姿――

一方に、別の物音が聞える――

セーラ、その方を見る――

× × ×

取りこわされた建物の廃墟で、古レンガを集めている

男の子たちの姿――

その脇を―― 芥子菜の篭を抱えたセーラ位の少女が、

幼い妹の手を曳いて売りに出かける姿が見える。

× × ×

じっと見るセーラ――

セーラのM「そうなんだわ……ここでは、あんなに小さいうちから、みんな、一生懸命に働いているんだわ……」

その時、背後に――

ピーターの声「お嬢さん……！」

セーラ、振向く――

ピーターに続いて、くぐり戸から御者のようにシルクハットをかぶった父親が、杖にすがって片足を引きながら出て来る。

ピーター「父さんですよ」

セーラ「まあ……」

ピーターの父親、丁寧にシルクハットを脱ぐと一礼する――

父　親「これはこれは、お嬢様……ようこそ」

セーラ「セーラです……よろしく」

父　親「お話はいつもピーターから聞いておりました……さ、汚い所ですが、どうぞ」

20

同・中

父親、ピーターに続いて、入って来るセーラ――ベッドで咳をしていた母親が、急いで身づくろいして、降りて来る――

ピーター「母さんです」

母　親「まあまあ、こんな所へようこそおいで下さいまして……」

セーラ「セーラです……ピーターから、ずっとお身体がお悪いと聞いていましたけど」

母　親「有難う存じます。お蔭様で少しは良くなったようで……それより、お嬢様、この度は、大変な事になられたそうで…」

セーラ「え、ええ……」

父　親「ご心配なく、お嬢さん……こんな所でよろしければ、いつまで泊っていいて下さってもよろしいんですよ……なあに、怪我をして御者こそ辞めましたが、この通り馬具の修理を頼まれてましてね」

父親の指す一隅に、修理中の鞍など。

父　親「お嬢さん一人が食べる位、決して御不自由はさせませんとも」

優しく頷く母親——

セーラ「有難う、小父様……でも、私、決心したんです」

父　親「決心……？」

セーラ「ええ……なんとか働いて、独りで強く生きて行こうって……だって、ピーターのお友達だって、みんな立派に働いている事を教えて貰ったんですもの」

ピーター「お嬢さん……！」

セーラ「ピーター、お願い……私に出来る働き口を探して下さらな

い？」

顔を見合せる父親、母親、ピーター。

その時、表戸を叩く音——

声「ピーター、オレだよ。みんなを集めて来たぜ」

ピーター「ジムだ……お嬢さんの為に、なにか出来る事はないかって、仲間に呼びかけといたんです」

セーラ「まあ……」

21 同・表

集っている煙突掃除のジム、ガラス修理の少年、泥さらいの少年、ゴミ集めの少年、レンガ拾いの少年、それに新聞売りの少年、靴磨きの少年たちが集っている。

出て来るピーターとセーラ——

ピーター「みんな、紹介するよ……こちらが今日から、オレの家に

住んで頂だく事になったセーラお嬢様だ」

セーラ「セーラです、よろしく」

「こちらこそ」「ようこそ」とそれぞれに微笑で応ずる少年たち。

ピーター「所で、早速だけど、みんなに相談があるんだ……実は、お嬢さんは、働きたいと決心してるんだ。それで、なにか良い働き口があったら、教えて欲しいんだよ」

ジム「しかし、オレの煙突掃除じゃ、お嬢さんに手伝って貰う訳には行かないしなぁ」

ガラス屋「オレのガラス直しも、お嬢さん向きじゃないなぁ」

新聞少年「どうだい、オレと一緒に新聞を売ってみちゃ……（呼び声）ええ、ロンドン・タイムスはいかがァ……」

靴磨き「駄目駄目……オイラが靴磨きを教えてあげるよ」

口々に騒ぐ少年たち

ピーター「待ってくれよ。そんな仕事、みんなお嬢さんに出来る筈

ないじゃないか」
ジム「そうだ、ピーター、いい考えがあるぞ……マギーおばさんに話してみるんだ」
ピーター「マギーおばさん？」
ジム「そうさ。あそこなら、お嬢さんと同じ位の女の子も沢山働いてるし、きっと気に入って貰えると思うよ」
一斉に賛成する少年たち――
ピーター「よし。じゃ、お嬢さん、行ってみましょう」
セーラ「え、ええ……」

22 マギーの家の中

肥った中年女マギーの前に、ピーター、セーラ、ジムが来ている――
マギー「成程、そう云う事情とあっちゃ、引受けない訳には行かな

いね……いいとも、うちで使ってあげるよ」

ピーター「うわあ、よかった！」

セーラ「有難うございます」

マギー「ごらんの通り、うちはマッチを作って売ってる商売だかね」

一方で、マッチのレッテル貼りをしているセーラと同年配の少女たちの姿。

マギー「なあに、馴れれば楽な仕事さ。今日からでもやってみるかい？」

セーラ「はい、お願いします」

マギー「そうと決ったら、附添いは邪魔だね」

ピーター「じゃ、お嬢さん……おばさん、よろしく」

マギー「ああ、心配しないで任しとき」

ピーターたち、顔を見合せながら、出て行く――

マギー、改めてセーラを見直す――

マギー「さてと……そうは云ったものの、あんたは、マッチ作りに

使うにゃ、惜しい器量だねえ」

セーラ「えっ……」

マギー「どうだい、売る方に廻ってみちゃ」

セーラ「は、はい……どんな仕事でもするつもりです」

マギー「その心掛けが大切さ」

その時、表から、首からマッチ売りの空ケースを提げたセーラと同年配の少女が入って来る。

マギー「あ、お帰り……随分早く売り切って来たね」

小女、無言で頷くと、ポケットから小銭を摑み出してマギーに渡す。

マギー「あいよ……」

受取って数えると、その中のコイン一つを少女に渡す。

マギー「さ、お前の取り分だよ」

少女、無言でコインをポケットに納める。

マギー「さあ、丁度よかった……今日からうちで働く事になったセ

ーラだよ」

セーラ「セーラです、よろしく」

少女、セーラを見て微かに頷く。

マギー「さ、メアリ……新入りのこの子に、商売のコツを教えてやるんだよ」

23 道（夕景）

マッチ売りのケースを首から掛けたメアリとセーラが来る――

メアリ「あんたも、みなし児かい？」

セーラ「え？……ええ……」

メアリ「あそこにいる子は、みんなそうだよ……あんた、わりとベッピンね」

セーラ「そ、そんな事ないわ」

メアリ「いいのよ……ベッピンの方がマッチは売れるわ」

24 橋の上（夜）

行き交う通行人たち――

メアリ「いい、こうやるのよ」

メアリ、通行人たちに悲し気な声で呼ぶ。

メアリ「旦那様、マッチは如何ですか……風が吹いても、よく点くマッチ、附け木一列で半ペニーですよ」

通行人の一人が立停り、小銭を出す。

メアリ「はい、毎度有難うございます、旦那様」

通行人、マッチを買って去る――

メアリ「こうやるのさ……あんた、お嬢さん育ちみたいだけど、出来るのかい?」

セーラ「え、ええ……やってみるわ」

微笑するメアリ――

セーラのN「私は今、勇気を出して、新しい生活に飛び込もうとしていました……」

（第四十二話）